スポーツの試合場面において心理的要因が認知的判断に及ぼす影響の検討 ：バレーボールの試合におけるラリー終了の原因に対する選手の判断から

丹 羽 劭 昭¹⁾ 長 澤 邦 子¹⁾

Effect of psychological factors on the cognitive judgment in situations of sports contests: Especially from the players' judgement on the cause of ending the rally in volleyball games

Takaaki Niwa¹ and Kuniko Nagasawa¹

Abstract

The purpose of this study is to examine the effect of emotions, cognition, personality and attitude on cognitive judgment by means of players' judgment on the play that ends the rally (the finishing play) in situations of volleyball games. The subjects number sixty-nine in all of four volleyball teams of women's colleges and universities. Each subject watches the video-tape, one set of the game of her own team, and is asked to write which play has ended the rally. Then, the written answers are checked in relationships with cognition of the opponent's strength, with her likes and dislikes of the opposing team, and with the results of two personally tests and one attitude test. The following conclusions are reached.

1. All the teams have strong tendencies for adjustment of emotions and cognition by attributing the opponent's points and rights rather to her own failure than to the opponent's success.

2. As to the personality factors, those who show the higher traits of objectivity make the more objective judgments, those who are the less self-centered take the more failures as their own, those who have the greater sense of inferiority show the greater tendency of ego-centric cognition, and those who get the less points in cultural characteristics test of British sports are the more willing to take failures as their own. Accordingly, the personality factors and the attitude factors toward sports influence cognition of the causes of points and rights.

3. The cognition of opponent's ability compared with the ability of her own team influences cognition of the causes of points and rights.

Key words: cognitive judgment, emotion, volleyball, personality

(Japan J. Phys. Educ., 37: 45-53, June, 1992.)

キーワード：認知的判断, 感情, バレーボール, パーソ
ナリティ

問 題

多くのスポーツ場面特に球技系の試合場面では、選手や審判は判断しにくい状況でもセーフ

かアウトかを判断しながらゲームを進行させなければならない。しかしその判定という行動は必ずしも客観的に正しいものばかりではなく、判定をめぐる多くのトラブルも起こっている。こうした判定行動をめぐるトラブルの多くは、判定者の判断に原因があり、この判断に及

1) 奈良女子大学文学部
〒630 奈良市北魚屋西町

1. Nara Women's University, Faculty of Letters, Kitauoya-nishimachi,
Nara (630)

ばす要因を検討することは審判的行動のあり方を検討する上で極めて重要である。そこでそれらの要因をバレーボールの試合場面をとりあげて実験的に明らかにしたい。

一般に、ある特定の目標に向かって、互いに一貫性・整合性のある体制化された目標指向行動は、動機づけられた行動であるといわれる。そしてその動機は、経験を通して次第に習得され学習されていく。その場合、外界から入ってくる情報を受容し、処理し貯えていく認知体制も、次第に学習され形成される。人々は状況から提示される全ての情報に反応するのではなく、特定の部分に選択的に注意を集中し（知覚の選択性）反応する。また知覚過程は、入ってくる情報に位置づけを与え、意味を与える（情報の記号解読または符号解釈）。これらの過程の違いは、状況や個人差による差異、すなわち、情報自体と同時に受け手の特徴に原因するところが大きいと考えられる²⁾。たとえば、バレーボールの選手が相手のポイントとなったボール落下の原因を、相手のサービスエースと考えるか、味方のレシーブミスとみるかは、選手が直面している状況やその状況との関係でどのような経験をしているか、さらに相手に対する好き嫌いの感情や強さの認知などが、その判断に大きく影響する。

このように動機づけられた行動の体制は学習

過程に大きく依存するが、情報を認知し判断する際、その対象（たとえばボールの落下）は正（positive）または負（negative）の連合を伴った対象、すなわち誘発性をもった（valenced）対象となりやすい。この認知された対象と連合する誘発性は永続性があり、関連性のある対象の判断に影響する重要な要因となると考える。したがってこの誘発性は、個人の行動の長期的体制やその一貫性・整合性を理解する重要かつ中心的要因と考えられるが、それを本研究では主に感情的要因においてみた。

こうした考えから、行動は被験者の過去の経験に基づいて形成される現在の態度と現在の状況との関数として決定されるとするニューカムら¹⁰⁾の態度と行動との関係についての図式をもとにし、さらに今日では広く容認されている人間の行動における感情、認知、行動の3成分を、測定可能な独立変数（刺激）と測定可能な従属変数（行為・反応）間の媒介変数として、態度の変数間関係の図式を提唱した Rosenberg and Hovland¹⁷⁾の考えを加え、さらにバレーボール場面を念頭において、図1のような仮説的図式を考えた。

すなわち、バレーボールの試合における審判的判断（認知的判断行動）は、その場の状況（与えられた状況）によって異なるが、同じ状況であったとしても、自チーム・相手チームに対す

図1. バレーボール選手の審判的判断行動に影響を及ぼす諸要因

る感情的枠組や認知的枠組み、たとえば好き嫌いの感情や、強さの認知やどのような戦法（たとえば3段攻撃の最終段階としてのスパイク、フェイントなど）を用いているかという認知によっても大きく影響される。それらの感情的枠組や認知的枠組は、過去の経験の蓄積の結果である選手のパーソナリティやスポーツに対する態度（たとえば公正な態度や勝敗重視の態度）等によって影響されると考えるのである。

簡単に要約すると、過去の経験に基づいて形成された現在の態度や性格は、認知的枠組と感情的枠組を与え、それらの感情的・認知的枠組みは現在の試合の状況という与えられた状況と関係させられながら認知的判断に影響し、それらの結果として、判定を下すという最終行動が起こると考えたのである。

その際、審判的認知的判断行動に影響する多くの要因のうち、特に感情的要因を中心に考察を進めたい。その理由は、認知的判断は感情的要因に極めて強く影響されることが、「あばたもえくぼ」のたとえのようにしばしば経験されるからである。

こうした認知と感情との関係を解明しようとした研究は多くなされているが、その代表的な研究が、ローゼンバーグ (Rosenberg)^{16,18)}に代表される感情・認知の整合性理論であろう。彼は、態度対象に対する個人の感情や評価は、認知的構成成分と整合する傾向があるとの仮説を立て、感情と認知の2成分間に忍耐水準以上の非整合性がある場合は、その非整合性を減少するよう認知と感情の一方または両方を変化させて整合性を保とうとすると仮定した。実験の結果、感情的成分の変化に伴って認知的成分の変化がみられ、認知的再構造化は、感情的成分の変化と一貫する方向で変化していることを見出した。こうした一連の実験結果から、態度変化には、認知的反応の変化によるものと感情的反応の変化によって生じる2系列があることを指摘した。ローゼンバーグの理論は、多くの研究を生んでいるわけではないが、感情と認知の整合性が態度変化の重要な決定因であるとの一般

的考えを補充する重要な見解だと考えられる。運動との関係でこうした視点からの研究も若干出されている。たとえば、Hastorf and Cantril⁹⁾のフットボールを扱った研究がある。かれらはある定期戦で、対戦した2チームにそのフィルムをみせ、各チームの反則の数をチェックさせた結果、両チーム共、相手チームの反則が多いと認知した。これは、同じ刺激に対しても個人の関わり方によって認知の違いが発生したことを明らかにした研究で、互いに相手チームに対する態度（好き嫌いの感情）が明らかに異なる2チームの認知的判断は明らかに異なることを示している。一般的には、客観的にみれば反則と認められるものであっても、自チームの反則とは認めたくないものである。その心情的な不整合を、自チームの反則ではなく、他に原因を求めること（たとえば審判の判定が厳しかった等）によって心情的な整合をはかり安定しようとするのである。また、Hastorf and Cantrilの結論とは別に、こうした事態を、いわば感情・認知の整合性理論によって説明することもある程度可能であろう。我が国でも原因帰属の研究領域からすぐれた研究が報告されている。たとえば体育・スポーツ場面での能力要因^{6,11)}（特に勝敗）や個人的特性（個人差）^{4,5)}の観点からの研究などである。しかし質問紙を用いた調査によるものが多く、また要因数が比較的少ない上に、実際のスポーツ場面でなかったり、スポーツ場面であっても一試合を通しての原因帰属を扱っており、これらの要因で現実のスポーツの試合場面における審判的な認知的判断行動を説明するにはやや無理があると思われる。したがって、本研究では実際の試合場面を用い、しかも一試合毎に同一場面（フィルム）を試合参加選手全員に観察させ判断を求めるという方法で、しかも従来より多くの試合を多くの選手にみせ、やや多くの要因（変数）を用いて、実際のスポーツ場面でおこっているこうした審判的判断行動を全体的に説明してみたいと考えた。

具体的には、バレーボール試合場面でのラリー終了の原因となったプレーについての審判

的判断行動に及ぼす心理的諸要因の影響について、次の仮説を検討することが本研究の目的である。

仮説：スポーツの試合場面での選手の審判的判断行動には、次のような要因が影響を与える。

1. 認知と感情が不整合の場合は、認知的判断を感情に整合させようとする心理的メカニズムが働く。

2. パーソナリティやスポーツに対する（価値）態度が影響する。

3. 対戦チームの実力の差（強さや権威）の認知が影響する。すなわち感情と認知間に矛盾が少ない時には、認知的要素間の協和をもたらせようとする心理的メカニズムが働く。

方 法

対象：関西女子大学バレーボール連盟の3部に所属する4チーム（D大7名、K大12名、N大11名、J大8名とする）延べ69名。

手続：調査1 1987年の春期リーグをVTRに撮り、撮影した自チームの試合（1セット）を9、10月に各チームにみせ、各ラリーが終了した原因となったプレー（スパイク、レシーブミスなど）を記入させた。被験者がチェックしたVTRは、D大、K大、N大はJ大との対戦のもの、J大は5チーム（D大、K大、N大にB大、H大を加えた）との対戦のものである。

調査2 調査1の後、試合についてのアンケートを行った。内容は、①バレーボール経験年数、②相手チームに対する権威的認知（強さの認知の5段階評価）、③同じく好感度（5段階評価）である。

調査3 パーソナリティ検査として、①YG性格検査、②CAS不安性格検査（CASはCalifornia Anxiety Scaleの略）^{20,21)}、③スポーツに対する態度調査（丹羽、金子の作成）¹⁵⁾を実施した。パーソナリティ検査として、この二つを用いた理由は、審判的判断行動にどのようなパーソナリティの要因が影響するかということの判断が難しいため、二つの検査から調べることにした。一つは、パーソナリティを特性とい

う側面から全体的に調べる検査として、一般的かつ信頼性の高い標準化された検査としてのYG性格検査を用い、パーソナリティの全特性（特性群）を対象とした。他の一つは、審判的判断行動は感情への整合と関係していると考えられるところから、パーソナリティの感情的側面のうち、こうした行動に対して一つの基本的性質をになうと考えられる不安特性を調べることが有効ではないかと考え、標準化された信頼性の高いCAS不安特性検査を加えることにした。また、スポーツに対する態度検査では、審判的判断行動に対して影響する態度としては、公正、フェアプレーの精神、勝敗重視、その他多くが考えられるが、そうした内容だけを直接調べる態度検査がみられなかった。そのためそれらの内容をも含めてスポーツの文化的特徴を調べる検査として、すでに論文¹³⁻¹⁵⁾や著書¹²⁾等でとりあげられ、その結果に対して一応の評価がなされている態度調査として「スポーツに対する態度調査」をとりあげた。

調査内容の処理：VTRによってチェックされた内容は、自チームの得点・得権（以後、自チームの正事態と呼ぶ）と相手チームの得点・得権（以後、自チームの負事態と呼ぶ）に分ける。自チームの正事態は、自チームの成功（以後、自成と略す）と相手チームの失敗（以後、相失と略す）に分け、自チームの負事態は自チームの失敗（以後、自失と略す）と相手チームの成功（以後、相成と略す）に分ける。そして各個人のチェックした前述の4項目の認知的判断（自成、相失、自失、相成）の数を調べ、これを各個人の主観的判断値とする。

次に客観的判断値は、各試合の記録員によって、公式記録の得記²¹⁾の方法を用いてチェックされたものを基準とする。

CAS不安性格検査結果は、5因子（尺度）の各粗点を10段階の標準得点に換算し、各不安因子得点として用いるとともに、5因子の合計点を不安度として用いる。

スポーツに対する態度は、丹羽、金子の研究にもとづいて、英、米、日各国系スポーツの文

化的特徴点¹⁵⁾を算出して用いる。

結果と考察

1. 主観的判断のチーム差の検討

チーム別に、ラリー終了の原因についての4項目の認知的判断を検討するため、前述の主観的判断値と客観的判断値(J大については5試合の平均)を算出する。そしてチームの主観的判断値の平均を客観的判断値の平均値で割り、これを主観的判断度として、4種類の認知的判断のチーム平均値を算出し、比較したのが図2である。

1) チームに共通する傾向

図2から、4チームに共通する傾向は、自チームの負事態(相手チームの得点・得権)の時、相手チームの成功(相成)が自チームの失敗より少なく($p < .01$)、主観的判断度が1.0より小さいことである。つまり自チームの負事態の原因を、相手のエースによると考えることは相手チームの優位を認めることで、感情的に不快(感情・認知の不整合)であるため、ラリー終了の理由を相手チームの成功より自チームの失敗と

認知することで感情と認知の整合性を得ようとする心理的メカニズムが働いていると考えられる。こうした現象は、Luginbuhl et al.⁷⁾が self-serving attribution を実験的に検討した際、成功だけでなく失敗もまた内的要因(能力不足)に帰属されることを報告し、本研究と似た結果を得ている。その理由について Miller and Ross⁸⁾は、失敗後に自我防衛帰属が生じる条件の一つとして、自尊心のレベルすなわち高い自尊心が関係していることを実験的に証明した。こうした研究から推察すると、本実験の被験者となったバレーボール選手たちは、概して高い自尊心を持っていたため、負事態(失敗に相当する事態)の原因を例えば自分たちは能力はあるが、たまたまその場面でミスをしたと思うことで自我を防衛し、感情的安定を得ようとする心理的メカニズムが働いたと考えることもできる。いずれにしても、こうした現象が4チームに共通してみられるということは、感情的成分に整合する方向で認知的判断が行われるということが、基本的な共通する心理的メカニズムとして存在すると考えられる。そして、その上で個々に他の要因が関与してくると推察される。

2) 各チームの特徴

次に、各チームについて4項目の主観的判断度の1.0からの差(絶対値)を出し、比較的客観的判断をしているD大、K大と他チームとのt検定をした結果を表1に示す。

図2、表1から、D大は4チーム中最も客観的判断に近い認知をしており、次いでK大であることがわかる。また図2から、自成と自失の

図2. チーム別の4項目(自成, 相失, 自失, 相成)の主観的判断度の比較

表1. 主観的判断度1.0からの差の検定(D大, K大との差)

	D大	K大	N大	J大
平均	0.23	0.38	0.61	0.48
標準偏差	0.19	0.22	0.37	0.42
D大との検定(t値)	/	3.02*	5.75**	5.19**
K大との検定(t値)	/	/	3.59**	2.23*

* $p < .05$ ** $p < .01$

表2. 各事態における主観的判断度の2判断間の差の検定

	K 大		N 大	
	自成一相失	相成一自失	自成一相失	相成一自失
差の平均	0.53	-1.00	-1.34	-1.13
t 検定(t 値)	9.57**	12.32**	7.32**	12.20**

**p<.01

表3. 客観性欠如特性についてD大と他大学間の差の検定(t 検定)

チーム	平均	標準偏差	D大との差の検定(p)	D大との差の検定(p)
D大	6.29	2.22	/	/
K大	6.33	4.27	0.49	/
N大	9.09	4.44	0.05	0.08
J大	8.63	2.67	0.02	0.05

認知の多い、いわゆる自己中心的認知型のチームとしてK大、相失と自失の認知の多い、いわゆる失敗中心認知型のチームとしてN大を選び、自成一相失、相成一自失と相成間でt検定を行った結果を表2に示す。

表2から、予想した通りK大は、自成一相失をより多く認知し、N大は相失・自失をより多く認知していることがわかる。またJ大は自チームの正事態では客観的判断に近いが、負事態では極めて主観的判断になる。このようなチームによる判断の傾向の違いには、パーソナリティやスポーツに対する態度が影響しているのではないと思われる。

そこで、YG検査、CAS不安性格検査、スポーツに対する態度調査の結果から各チームの平均値間の有意差を検定した結果を表3-6に示す。表3-6から、認知的判断に及ぼす心理的諸要因について検討する。

まず、表3、4のYG検査の結果から、相対的により客観的判断をしたD大とK大は、客観性の欠如特性の得点が低く(表3)つまりより客観的にものをみる性格をもち、自己(自チーム)中心的認知の強いK大は、劣等感特性の得

表4. 劣等感特性についてのK大と他大学間の有意差検定

チーム	平均	標準偏差	K大との差の検定(p)
K大	10.83	4.32	/
D大	5.00	6.25	0.03
N大	6.82	3.95	0.02
J大	7.00	3.38	0.01

表5. スポーツに対する態度・英国系スポーツの文化的特徴要因についてのN大と他大学間の有意差検定

チーム	平均	標準偏差	N大との差の検定(p)
N大	320.7	51.62	/
D大	360.1	39.57	0.05
K大	350.6	34.88	0.07
J大	358.6	48.79	0.02

表6. 自我の弱さ特性についてのJ大と他大学間の有意差検定

チーム	平均	標準偏差	J大との差の検定(p)
J大	5.88	2.23	/
D大	3.14	1.68	0.002
K大	4.92	2.11	0.04
N大	4.73	1.74	0.04

点が高い(表4)。また表5から、失敗中心認知型のN大は、英国系スポーツの文化的特徴²²⁾の得点が低く、表6から、自失を最も多く認知したJ大は、不安特性のうち、自我の弱さ要因の得点が高いことがわかる。主観性の強い人は主観的判断をしやすいし、劣等感の強い人は、自分の劣っている点を強く意識している人で、自己中心的な認知的判断を行うのが普通であろう。また、スポーツ観のようにある価値観をもってスポーツに接している人は、その価値観に基づいて認知的判断が生まれ、自我が弱いために不安感情を多くもっている人は自分の失敗を強く意識するのはごく自然のあり方であると考えられる。したがって、こうした審判的判断行動

図3. 対戦チーム別の4項目(自成一自チーム正事態, 相失, 自失, 相成)の主観的判断度の比較

には、パーソナリティ特性やスポーツに対する態度等も複合して影響要因になると考えられる。

2. 対戦チーム別の主観的判断の比較

J大チームがチェックした5試合の4項目の主観的判断度を、1の図2と同様の方法で5試合の対戦チーム別に図3に示す。

図3から、自チームの正事態における認知に異なる傾向がみられる。対B大・K大・H大では客観的判断に近いが、またはやや自チームの成功(自成一自チーム正事態)をより多く認知する傾向があるが、対D大・N大では、自チームの成功をより少なく認知し、相手のミス(相失)をより多く認知している。その理由は、J大とN大は実力が同等と思われるのに、N大に敗れたことから、自チームに厳しい判断をし、さらに感情と認知の整合性を得ようとして自チームの正事態にもかかわらず自チームの成功をより少なく認知し、相手のミスをより多く認知したものと考えられる。対D大ではスコアに大きな差があり(15対1でD大が勝つ)、D大が圧倒的に強くJ大は実力が発揮できなかったため、判断の根拠は異なるが結果は

同様にやはり自チームに厳しい判断、すなわち自チームの正事態で自チームの成功より相手チームの失敗をより多く認知し判断をしたと思われる。このようにこれらの認知的判断には、相手チームとの関係が影響していると思われる。その関係は競争意識や相手の強さの認知など、たとえば実力が明らかに違う場合に行う審判的判断行動に及ぼす心理的メカニズムは、実力が互角の場合とは異なるであろう。

以上のことから、対戦チームとの実力(権威)の相違の認知は、ラリー終了原因の認知的判断行動に影響を及ぼすと考えられる。すなわち、仮説3と関連して、認知的枠組み(たとえば相手が圧倒的に強いという認知等)が、「与えられた状況(ボールの落下の状況)」に影響して、正事態では、普通なら自チームのエースと判断して、感情と認知の整合性を保とうとしやすい状態であるのに、相手チームのミスと判断しても多くの場合感情と認知の不整合(矛盾)を感じないのではないと思われる。そうした意味では、すでにある認知的枠組みが認知的判断行動に影響し、認知的要素間の協和を得ようとする心理的メカニズムが働いていると考えられる。なぜなら感情と認知間にそれほど矛盾がない場合には認知的要素間の矛盾をなくす方が心理的安定を得られると考えられるからである。このような心理的メカニズムは、フェスティンガー(Festinger)¹¹⁾によって認知的不協和の理論として明らかにされたものと同一のものと考えられる。従来の研究では、たとえば、鹿内¹⁰⁾はself-esteem(自尊心)の高いものほど、成功の原因を内的要因に、失敗の原因を外的要因に帰属させる傾向のあることを報告し、個人的特性の違いによる認知への影響を明らかにしたが、そうしたパーソナリティ特性以外に相手に対する認知的枠組みも大きな影響を与えることがわかる。

結 論

4大学延べ69名を対象に、大学女子バレーボールリーグ戦のVTRを用いて、自チームの

試合での得点・得権の原因認知の分析から、スポーツの試合場面において選手が行う審判的判断行動に影響を及ぼす心理的諸要因についての仮説を検討し、次の結論を得た。

1. 全チーム共、相手チームの得点・得権（自チームの負事態）の原因を相手チームの成功より自チームの失敗と認知し、認知的判断を感情に整合させようとする心理的メカニズムが働く。

2. パーソナリティ要因では、客観性特性の高い人ほどより客観的な判断をし、自我の弱い人は自己の失敗を最も多く認知し、劣等感の強い人は自己中心的認知の傾向が強い。また、英国系スポーツの文化的特徴得点の低い人は失敗中心認知型の人が多い傾向をもつ。したがって、パーソナリティ要因やスポーツに対する態度要因も、得点・得権の原因認知に影響を及ぼす。

3. 対戦チームの実力の差（強さ）の認知も、得点・得権の原因認知に影響を及ぼすと思われる。すなわち、感情と認知間に矛盾が少ない時には、認知的要素間の協和をもたらしそうとする心理的メカニズムが働くと考えられる。

注

注1) 国際大会などでは記録されないが、主に団体の定期戦（日本リーグ、実業団チーム、大学リーグなど）で各選手のスパイク、サーブ、ブロックなどの決定率を算出するための資料となる。

注2) 丹羽ら^{12,15)}は、スポーツの文化的特徴は各スポーツが形成されてきた文化的・社会的背景によって異なる筈であると考え、日本で現在行われている英国系・米国系スポーツと日本系の武道を行っている選手のスポーツに対する態度の分析から、各国系スポーツの文化的特徴の抽出を試みた。その結果、英国系スポーツの文化的特徴として、たとえば、ベストを尽くすこと、フェアプレー、誠実さ、公正さ、スポーツはみるよりやって楽しむなどの態度の強調がみられるとし、それらをまとめてフェアプレーの精神を大切にし、人格主義的傾向をもち、Gentleman Idealのスポーツ観が背景にあると要約している。

文献 (References)

- 1) フェスティンガー：末永俊郎 監訳 (1965) 認知的不協和の理論。誠信書房：東京。〈Festinger, L. (1957) A theory of cognitive dissonance. Row, Peterson: Illinois〉
- 2) 古畑和孝 (1977) 態度の斉合化傾向。水原泰介 編 個人の社会行動。東大出版会：東京。p. 134.
- 3) Hastorf, A.H. and Cantril, H. (1954) They saw a game: A case study. *Journal of Abnormal and Social Psychology* 49: 129-134.
- 4) 伊藤豊彦 (1986) 原因帰属様式と身体的有能さの認知がスポーツ行動に及ぼす影響。体育学研究 31: 263-272.
- 5) 伊藤豊彦 (1985) スポーツにおける原因帰属様式の因子構造とその特質。体育学研究 30: 153-160.
- 6) 伊藤豊彦 (1980) 運動パフォーマンスにおける成功・失敗の原因帰属に関する研究。体育学研究 25: 105-111.
- 7) Luginbuhl, J.E.R., Crowe, D.H. and Kahn, J.P. (1975) Causal attributions for success and failure. *Journal of Personality and Social Psychology* 31: 86-93.
- 8) Miller, D.T. and Ross, M. (1975) Self-serving biases in attribution of causality: Fact or fiction? *Psychological Bulletin* 82: 213-225.
- 9) 三宅一郎・中野 弘・水野嘉司・山本嘉一郎 (1977) SPSS統計パッケージII解析編。東洋経済新報社：東京。pp. 217-254.
- 10) ニューカム・ターナー・コンバース：古畑和孝 訳 (1973) 社会心理学—人間の相互作用の研究。岩波書店：東京。〈Newcomb, T.M., Turner, R.H. and Converse, P.E. (1965) Social psychology: The study of human interaction. Holt, Rinehart & Winston〉
- 11) 西田 保 (1980) スポーツにおける勝敗の原因帰属に関する研究。名古屋大学総合保健体育学 4(1): 83-90.
- 12) 丹羽劭昭 (1988) スポーツと文化。末利 博 他編 応用心理学講座 8。スポーツの心理学。福村出版：東京。pp. 10-25.
- 13) 丹羽劭昭・牧垣純子・長沢邦子 (1987) 卓球選手のスポーツに対する態度の特徴の比較研究。スポーツ教育学研究 7(2): 53-59.
- 14) 丹羽劭昭 (1985) スポーツ参加婦人の態度からみたスポーツの文化的特徴。体育・スポーツ社会学会研究会編 体育・スポーツ社会学研究 4。道と書院：東京。pp. 95-121.
- 15) 丹羽劭昭・金子洋子 (1983) 大学運動部員の態度からみたスポーツの文化的特徴—特に規範を中心に—。体育・スポーツ社会学会研究会編 体育・スポー

- ッ社会学研究 2, 道和書院: 東京, pp. 1-23.
- 16) Rosenberg, M.J. (1960) An analysis of affective-cognitive consistency. In: Hovland, C.I. and Rosenberg, M.J. (Eds.) Attitude organization and change. Yale Univ. Press: New Haven. pp. 15-64.
- 17) Rosenberg, M.J. and Hovland, C.I. (1960) Cognitive, affective and behavioral components of attitudes. In: Hovland, C.I. and Rosenberg, M. J. (Eds.) Attitude organization and change. Yale Univ. Press: New Haven, pp. 1-14.
- 18) Rosenberg, M.J. (1956) Cognitive structure and attitudinal effect. *Journal of Abnormal and Social Psychology* 53: 367-372.
- 19) 鹿内啓子 (1983) 他者の成功・失敗の原因帰属に及ぼす self-esteem の影響. *実験社会心理学研究* 23(1): 27-37.
- 20) 対馬 忠・辻岡美延・対馬ゆき子 (1985) C.A.S.不安診断検査解説書 (改訂版), 東京心理: 東京.
- 21) 対馬ゆき子 (1963) C.A.S.の日本標準化について. *教育心理学研究* XI(2): 86-97.

(平成 3 年 5 月 28 日 受付)